

# 日本文章学院とその小説講義

山本 歩

はじめに

明治・大正期の文学愛好者たちは、中心文壇から大いに影響を受けつつも、周縁的なコミュニティーの中で創作し、また創作のために読書することで、〈文学〉や〈小説〉を担っていく。青少年の集う雑誌などを出版業界の囲い込みだと見なすこともできるが、そのような蠢動が文学の隆盛を下支えしてきたこともまた確かであろう。本論では、明治・大正期に、

常時一〜二万人規模の固定的受容者を獲得していた新潮社の事業（日本文章学院）を取り上げ、その一例と捉えたい。

今日まで文芸界に大きな位置を占める新潮社であるが、その出発期を支えた通信教育事業については、実態把握が十分に行われてこなかった。そもそも同社の社史からも詳細なところはわからず、資料の散逸もあって、把握は困難である。ただし、貴重な先

行研究である宮崎睦之の二論文がその特徴と意義<sup>①</sup>、また同社の中核的文芸誌『新潮』との関係<sup>②</sup>を教えてください。加えて、株式会社新潮社の資料室では主要な関係資料が保管されている。本稿はそれらに基づき、「一」にて基礎的情報の整理を行った上で、「二」「三」で小説創作を牽引したその教育内容の一端を看取する。

一

日本文章学院は明治三十一年に大日本文章学会の名称で出発、『大日本文章学会講義録』を発刊した（講義録の発刊は明治三十二年一月）。新声社の佐藤義亮（当時は儀助）、彼の右腕である梅溪<sup>③</sup>高須芳次郎が、講義録の流行から発案したとされる、日本初の文章専門の通信教育機関である。

村松梢風は、大日本文章学会が明治三十五年に行

本文章学院へと改称したこと、その際に講義録の内容が書き改められたこと、大正八年に廃刊したことを記述している<sup>③</sup>。梢風の述べる通り、明治三十五年十月に本文章学院へと改称され、講義録の名称も『文章講義』と改められる。

『新声』売却・新潮社立ち上げ後は『文章講義録』へと改称、『文章講義録』以降は一貫して奥付に「明治四十一年十一月五日内務省許可」の許可日が見られる。つまり許可手続きの省略できる雑誌扱いで発行されたわけだが、宮崎論では同時期の広告も参照し、この明治四十一年十一月頃を『文章講義録』の創刊と位置付けている。なお、大正四年四月以降は『最新文章講義録』の名称が使用された。

また、明治四十一年十一月から大正五年三月までは『新文壇』という副教材・機関誌を受講生に無料配布していた。この『新文壇』が文章作法、とりわけ小説作法にまつわる記事を供すると共に投書雑誌の性格を併せ持ち、いわば初学者向けの『新潮』のような役割を果たし、大正五年五月創刊『文章倶楽部』の前身となったのである。

本文章学院そのものの終焉について、梢風は「大正八年に廃刊」と述べ、恐らくはそれを参考にした高橋秀晴も「一九一九年まで」と記している<sup>④</sup>。ただし、『新潮社一〇〇年図書総目録』の記述によれば、同院が「事実上終了」したのは大正十二年九月十五日である<sup>⑤</sup>。

学院の課程は次のようなものである。院生になる  
と月に二度、講義録が送られてくる。講義録には、論文、小説などの文章作法、文範、修辞学、古典評釈など、六〇八編ほどの講義がそれぞれ分載されている。付録の添削券と共に自身の文章を送れば、通信添削が受けられる。一年間の受講と実践を重ね、卒業試験（作文）に合格すれば、証書が与えられる。卒業後も「院友」として特典を受けることができた。さらに、大正二年には「院友」向けに『近代文学講義録』が創刊、文学史や思想史など、より高度な内容が受講できた。

時代は「方今、文章作法の著書、多きこと、実に、汗牛充棟も、唯ならざるなり」<sup>⑥</sup>という、「文章作法」の乱立を生み、文章講義録に関しても後述の類似品

が登場していくことになるのだが、日本文章学院は創立十年の時点で卒業生「四万人」超となる成功を収めていく。

日本文章学院の性質・独自性については宮崎論文で言及されている。宮崎は特に添削制度と付録雑誌『新文壇』に注目し、「従来の講義録とも投書雑誌とも重なる部分を持ち合わせながら、〈添削〉という実践的な指導によって講義録、投書雑誌双方から独自性を打ち出していた」<sup>⑦</sup>と結論づけている。また、作書や文芸書の販売促進のため「日本文章学院という母体に、あらかじめ読者を確保」していたという、したたかな戦略性にも触れている<sup>⑧</sup>。

実際、講義録や『新文壇』の広告欄では新潮社の発行者が副読本・参考書として次々に紹介され、購買意欲を刺激していた。いわば、劇場型の販売戦略がとられていたのだ。また、広告には成績優秀者への「学費貸付」(高等学校への学資を貸与)や「就職紹介」(新聞記者、雑誌記者、編集所員、作文教師等)も掲げられ、いわゆる顧客ロイヤルティを喚起するような戦略が採られていた。そして、こうした広告

戦略が、学資不足のために通信教育を選ばざるを得ない、また立身願望を抱く青年たちの傾向を、リサーチした上でのものであることは言うまでもない。

## 二

『大日本文章学会講義録』から日本文章学院『文章講義』へ、これは単なる改称ではなく、質的変換であった。前者は中嶋幹事「普通文組立法」を除けば、多くの講義は——例えば金子元臣「和歌評釈」など——過去の名文の「評釈」を主とするものだった。無論、それと並行して、作文を添削していたのだが、後者にあつてはその作文を支援する「作法」がより重点化される。そしてその中心に据えられたのが〈小説〉の作法であった。

〈小説〉を銘打つ文章の指導・添削が大々的に開始されるのは、日本文章学院への改称後、明治三十五年十二月十五月初刊の『文章講義』第五・六合併号「小説作法」からである。ただし「小説作法」及び「小説家となるの準備」は当初より学科表に記載され、第二号(同年十月二十日)時点で予告されている。

曰く「他に看ること能はざるものとして、最も囑望せられつゝある」講義、「斯道一流の大家に其講義を囑すもので、「来月発行の第三号のいかに異彩を放つ可きかは、生徒諸子の厚望し得る所なる可し」と（第二号「稟告」）。結局のところ講義開始は延び、「小説家となるの準備」は「小説作法」に合併、「一流の大家」ではなく「一講師」の講述となった。しかし五・六合併号「稟告」では再び「本院講義録中の異彩」と称し、明確に小説指導を特色と位置づけている。新声社は文芸出版の手ごたえを確かなものとしつつ、自ら書く／書こうとする人々に市場を見出したのである。

『文章講義』版「小説作法」の大意を簡単に記しておこう。「小説」を「情感に訴へんが為めの目的」「社会的の出来事、亦は個人の生活運命の実状を基として、作者の想像、理想を透して産したる」ものと定義している。その定義に基づき、「理想」や「詩趣」を重んじる美的な小説を肯定し、一方で比較的にはリアリズムを歓迎しない。だがそうした傾向を持ちながらも、初学者の「習字手本」として写実小説を推奨してもいる。主義への固執よりも上達のプロセ

スを重視している指導傾向が窺える。『文章講義』版「小説作法」は後述のそれに比べやや視野狭窄ではあるものの、機能性や平易さを期した点が多く、日本文章学院の理念を反映している。

先述のように、講義録はその後『文章講義録』に改題され、内容も一新される。「進歩せる文壇の状況に省み」「時代に適応せしむるため」という判断<sup>⑨</sup>で、さらに「講述を平易に」したものだ。講師陣も著名な文章家を集めたものとなった。ここで「小説作法」は「小栗風葉」の名義で掲載された（代筆の可能性もあるが、便宜上ここでは著者を「風葉」と呼称しておく）。

風葉版は、「理想」や「詩趣」を重んじた『文章講義』版と異なり、時流に則り自然主義文学的な方法論が説かれる。事実の「観察」と「描写」を通して「人生の真相」を写し出すことが指導されているわけだ。だが、漫然と自然主義的手法を講義しているだけなのか。どうもそうではない。そこには自然主義的手法を選び取る必然性があった。

### 三

ところで、『文章講義録』の各講義については、「教育的といふ三字に省み講述上に大なる苦心をなし」たのだという。その一環として、講義間の「連絡を保つ」ことが企図された。

連絡を失はぬ為め、一本の糸を引けば全体が動く云つたやうな具合に、例へば第一号の『文章作法』で書翰文の講義があれば『時代文範』中と同じく書翰文が出る。雑録欄内にも書翰文に関する色々の資料などが出てくる。<sup>⑩</sup>

風葉版「小説作法」では文例として頻繁に『二十八人集』<sup>⑪</sup>からの引用がなされる。一方、講義「創作百話」や、毎号の巻末にある「雑録」にも『二十八人集』からの引用が見られる。このように、講義録編集の過程で、内容は意図的に操作された。現代的な言葉で言えば教科間連携ということになるか。ならば、指導の根幹的なテーゼもまた、統一が図られたのではあるまいか。

風葉版「小説作法」において、作法の基礎として言及されるのは「観照」である。あらかじめ確認し

ておけば、それは無論、同時代の〈芸術と実行〉の文脈で島村抱月らによつて持ち出された〈観照〉の延長線上にある。ただし、そうした中央文壇の論議はまさに遠く後背に沈んでいる。そもそも生徒たちの多くは、年齢的にも経済的にも、大仰な〈実行〉とは縁遠い。平易化、初学者向け小説作法として操作された〈観照〉は、漫然と過ぎていく日常へのアンチテーゼとして機能する。

風葉の述べる「観照」はどのような知的作業か。その前提となるのは、「日常の生活に於て、さまざまの経験が続けて居るが、多くはその時その時に追われて居るので、一つの事を一定の時処に留めて、いつまでもく之れを味つて見て、その中に秘んだ人生の意義を思つて居る余裕がない」という実生活の在り方である。だから小説の書き手は、自分が観照によつて得た印象を「よく心に思ひ浮かべ」ねばならない。それを「永い間幾度となく繰り返」すと、やがては「自分が最初に最も深く感じた処だけ」が残る。これは自然主義的な「観察」と「描写」の狭間に位置づけられるものだが、単なる態度や心構え

と捉えるべきではない。アイディアを練る、と言えば単純だが、僅かな空き時間や移動時間に可能な具体的創作活動なのである。

末期の『新文壇』に「予が文章講義録を読みしおもひで」という文が掲げられている(第十四卷第四号、大正五年一月。以下、『新文壇』の号数・発行年月は「14・4/T5・1」のように略記)。「S生」という「新進文士の雄として盛に活動しつゝある某氏」の追懐である。そこに語られるのは、講義録をどのよう  
に享受したかということであり、換言すれば、学院側の自認が窺われる掲載であった。「文が好きで作つて見たくて仕方がなかつた」が「田舎の事で教へる人がなかつた時」に学院と出会った「S生」が「種々な雑誌へ投書」した賞金で本や雑誌を買い、卒業後は『新潮』を読み出し、やがて上京するサクセスストーリー、「東京へ来てからも文章講義録を読んで居る人を沢山見た」⇨普及の度合い、「生徒に対する親切は、今も昔も変わりはない」⇨指導の温かみにも言及されている。ただそれ以上に注目しておきたいのは、「小説作法」や「美文作法」を筆頭に挙げながら、

彼が「野へ行くにも田へ行くにも、講義録をはなさず」「道を歩き歩き読」み、あるいは「山の田を耕しに牛を連れて行つた時」の昼休みにも読んだ——という記述である。そのように彼は、わずかな可処分時間のみならず、移動時間にも文章・小説の作法を携帯している。

携帯性はひとつの商品価値となり得る。学院側がそれを意識していたのは間違いないだろう。実際に新潮社は明治末期から「袖珍」を刊行物の魅力としてアピールし、そのような流れは新潮文庫の刊行に繋がっていく。ただし、講義録そのものは薄手ではあるがA5判程度で、格別に持ち歩きやすいわけでもない。だからここでは、形態上のポータビリティではなく、むしろ「日常の時空に定着し得る」内容こそ強調されているのだろう。日々の間隙に時間を作り(あるいは移動時間を活用し)文学に打ち込む——日本文章学院の想定する受容者たちの一典型がここにはある。

そもそも講義録という媒体は、経済的・地理的に進学が叶わない青年層をターゲットとしている。そ

して『新文壇』の投書から見て取るに、就業の傍らに学ぼうとする若年層が多かったと言える。「周囲と戦ひ、時間と戦ひつゝ、も熱心に斯の道をいそしむ」(丹一嗣、13・6/T4・9)、そんな者たちが日本文学学院を選んだ。

忙しい。それは物理的な作業量の問題のみでは、必ずしもない。身体を多動させる状況を忙しいと捉える認識が、我々の精神をも忙しくさせる。時計の普及<sup>⑫</sup>により時間意識が定着してきたことも「繁忙」の焦燥感を煽る。そのような時代にあつて、徳富蘇峰が指摘したように「時間に屑」の出ること、すなわち「実際に使用する時間よりも」、それに倍する「それ迄の時間」が空費されている<sup>⑬</sup>ことや、時間の有効活用(堀内新泉『時間活用法』(明治四十一年五月、東亜堂)等)もまた、青少年の関心事に挙がつてきたのだから。

『文章講義録』の講義から垣間見える日本文学学院の一つのテーゼは、こうした多忙時代・時間活用意識への対応にあつたはずだ。

佐藤名義での講義「創作百話」にはもつと明確な

形でそれがあらわれる。曰く、文章上達の必須条件は「多読・多作・多改」であるが「今の学生は他の学科が多過ぎる」が故にそれが不十分である。故に講義録と添削制度を活用して励まなければならないと主張している。無論、「繁忙なるにおはれて」という事情は学生に限定されない。既に職を持つ青年たち、就学の叶わない若者たちも同様だったはずだ。実現困難な(独学での)「多読・多作・多改」言説のオルタナティブが講義録と添削であつた。なるほど、「二日の労働を終つて家に帰つてまで、又机に向ふと云ふのは、中々大抵のことでは」ない<sup>⑭</sup>という状況は、それこそ現代に至るまで、読書・創作の普及を妨げている。

「観照」は、小説を書く行為そのものではない。むしろ、机に、原稿用紙に向かう時間の、それ以前に行うべき作業である。すなわち、通勤や通学の間に、農作業の途中に、蘇峰の言うような時間の「屑」の合間に行うことが出来る作法なのである。これは、自然主義的理論と(小説作法)の親和性を示す一例でもあるし、実体的な執筆と切り分けつつ、時間の

「層」の中で行える作法を明確に提示しているところに、日本文学学院のテーゼが垣間見えているのである。

それはまた、プロ作家ではない者、アマチュアや、それ未満の文学青年たちに対し、日常の生活時間を創作にあてよと指示するものであった。可処分時間に〈文学〉のパイを作り出し、僅かなスキマ時間にも〈創作〉を滑り込ませる。文学コンテンツの地盤形成を兼ねた新潮社一流のマーケティングであった。

生徒たちは「観照」をどこまで実践できたものか。確かなのは、機関誌『新文壇』に投じられる作品に、自らに許された僅かな「時間」を捉え、その合間に流れ込んでくる感興を描いたものが少なくないことだ。

例えばやはり仕事の帰り道を（間立紫帆「悲しき樵夫」、10・5／T3・2）。眠れぬ夜や（寺島幽流「午前二時」、4・4／M44・1）、ふと目覚めてしまった真夜中を（さみどり女「雪の夜のねざめ」、10・4／T3・1）を。仕事の昼休み（大山秀月「若き製図手の群」、9・2／T2・5）、家事の合間を（山口きみ

子「午後の一時間」、11・3／T3・6）。生徒たちは慈しむように描き込んでいる。

## 註

- ① 宮崎陸之（〈独習〉と〈添削〉と——佐藤義亮の講義録——）（『日本近代文学』第六十集、平成十一年五月、日本近代文学会）
- ② 「講義する雑誌、講義する書物——新潮社・明治四十年代、投書雑誌の黄昏にて」（『立教大学日本文学』第八十二卷、平成九年、立教大学日本文学会）
- ③ 村松梢風「佐藤義亮伝」（『佐藤義亮伝』所収、昭和二十八年八月、新潮社）一六二頁
- ④ 高橋秀晴『出版の魂』（平成二十二年、牧野出版）八五頁
- ⑤ 『新潮社一〇〇年図書総目録』（平成八年、新潮社）一一一頁
- ⑥ 横地正国『論文作法解』（明治三十八年五月、大日本中等学生会）二頁
- ⑦ 同①三八頁
- ⑧ 同②七一頁



⑨ 『文章講義（臨時増刊）』と題された小冊子より。表紙には「学制一覽」とも記されており、生徒勧誘のための広報物と思われる。「明治四十一年九月」発行、手元のものは「四十三年三月」再版のもの。

⑩ 同⑨ 一一頁

⑪ 明治四十一年四月刊。病床の国木田独歩慰労のために発行されたものであり、新潮社の各社史に同社発展の一大契機となったものと記されている。

⑫ 内田星美「明治時代における時計の普及」（橋本毅彦・栗山茂久編『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』所収、平成十三年八月、三元社）

参照

⑬ 徳富猪一郎『第十 日曜講談』（『国民叢書』、明治四十四年五月、民友社）

⑭ 栗原古城「読書の価値」（日本文学学院「文章講義雑録」）

謝辞 本研究は株式会社・新潮社の所蔵する当時の資料に依っている。同社、ならびに資料社・早野有紀子氏の協力に感謝する。